

## 巻頭言

## インドでの出来事

田中 良明

国際学会などで外国に出かけると時々思わぬ経験を  
するが、今回も思っても見ない出来事に遭遇し、  
また一つ新たな人生経験をした。

それは、今年の2月にある仕事で某氏と一緒にイン  
ドのマドラス（チェンナイ）に出かけたときの事  
である。予定していた現地調査や研究打ち合わせ、  
それに依頼されていた講演なども無事終えて、空港  
から帰路に付こうとしたところ、機内に乗り込んで  
からその某氏が急に体調を崩して動悸や胸苦しさを  
訴えたため、急遽そのまま飛行機を降りることにな  
った。そのとき実は、予定の便の出発が折り返し機  
の都合で2時間近く遅れてしまったこともあり、時  
刻は既に夜中の午前0時を回っていたのだが、我々  
はいったん出国手続きをした順路を逆戻りしてイン  
ドに再入国することになった。そして手配された救  
急車に乗って彼はそのまま入院することになり、私  
も一緒に病院へ付いていくことになった。

その後、2日間の入院の間に、某氏もすっかり体  
調が回復し退院可能となり、無事帰国することがで  
きたのだが、その間の救急室での対応や一般病室に  
移ってからの医療スタッフの患者への接し方、処置  
のやり方を間近に見て、インドにおける医療の現状  
と、そのレベルの高さを垣間見ることができた。退  
院の際には、救急患者で入院した彼のもとには数日  
分の薬の他、退院時サマリーや主な検査データ、胸  
部レントゲン写真、医療費明細書のほか、今後の生  
活指導書や飛行機での旅行許可証なども渡され、そ  
の手際よさにも改めて感心させられた。またこの  
間、医師、看護婦、栄養士などのスタッフが訪室し  
てきては、それぞれ引率してきた若い研修生たちを  
ベッドサイドで指導していくのだが、その実際のやり  
方を見て、日ごろ教育や研修の現場を担当している  
私にも、いろいろと参考にさせられるものがあつた。

それはさておき、私はこの某氏の入院付き添いの  
間に、思いがけず院内である光景を見て、はたと心  
に打たれるものがあった。それはたまたま通りがか  
った病院のエレベータホールで、エレベータを待つ  
ていたときのことである。ホールの壁際に飾られて  
いた小さな仏像の前で、勤務交代のときだと思ふの  
だが、出勤してくる看護婦たちがしばし立ち止まっ  
ては次々と仏像に手を合せたり触れたりしていくの  
である。今日も一日無事でありますようにと、お祈  
りしているのであろうか。またその他にも見舞い客  
と思われる中年の夫婦が丁寧に履物を脱いだ上で、  
持ってきたショールのような布をその仏像に掛けて  
やったりするのである。これらの光景は、私の目には  
彼らのごく自然な振舞いで行っているように映っ  
ただけに、日頃忘れていた物事に感謝する気持ちの  
大切さや、信仰心の原点を思い起こさせるのに充分  
の出来事であった。よく日本人には信仰心がなかと  
か、無宗教信者であるとか言われたりするが、普段  
の生活の中で、果たしてこのような感謝の気持ちを  
抱いて行動している人が一体どれ位いるだろうか  
と、その時ふと思ったりもした。

感謝の念は、今、日本人に一番欠けているものの  
一つであると言ってもよいかもかもしれない。このよ  
うな心情的な足りなさが、昨今問題になっている医療事  
故や医療訴訟などとも無縁ではないように思われ  
る。よく言われていることではあるが、日本は今や  
米国に次ぐ世界第二の経済大国になってはいるが、  
果たして心の中までどれほど豊かであると自信を持  
って言い切れるだろうか。教育や診療の現場で多く  
の人達と接する機会の多い者にとって、今回のイン  
ド旅行はいろいろな意味で貴重な贈り物を与えてく  
れた。

(日本大学医学部放射線医学教室教授)